

〈研修報告〉

令和4年度学芸員国外派遣研修報告 (台湾・国立故宮博物院)

八 田 真理子

報告者は、文化庁の令和4年度ミュージアム専門職員等在外派遣事業の採択を受け、令和4年12月10日から令和5年3月8日の約3か月間、台湾の国立故宮博物院（以下「故宮」とする）書画文献処にて研修を実施した。以下に研修内容と得られた成果について報告する。

受入先：国立故宮博物院 書画文献処

研修先：(1) 国立故宮博物院

(2) 国立台湾博物館

(3) 国立台湾歴史博物館

(4) 台北市立美術館

(5) 海端郷布農族文化館

(6) その他

1 研修の内容

当館は現在、施設の大規模改修のため休館している。この期間にはソフト面も拡充するため、当館では初の取り組みとなる所蔵品データベース作成を進めている。当館の特性に合わせたデータベース構築のため、故宮をはじめとする当地の各館で次の点を中心に調査を行った。

第一には中国美術を中心とするデータマネジメントである。当館のコレクションの中核をなす中国美術、特に書画分野では、皇帝や文人たちの鑑蔵印や、同時代あるいは後世の人々が作品に寄せた題跋等の資料が多数付属する場合がある。当館と同種のコレクションをもつ故宮や、その他の館では、どのように作品関連情報を整理しているのか。また、館内業務の中でデータベースをどのように利用しているのか。

第二にはデジタル技術を利用した資料活用である。台湾の博物館ではデジタル技術を積極的に取り入れ、作品データとAI・3D・動画を結びつけることで、研究資源と教育普及コンテンツを充実させている。どのような事例があり、どのように事業を計画、実施しているのか。

上記二点は、広く教育普及事業や文化財防災といったミュージアムの基礎的な役割の充実という点においても極めて重要な問題である。当館ではこれらの機能の補強並びにデータベースとの有機的な

連結も目指している。そのため、教育普及事業と文化財防災についても調査を進めた。教育普及事業は、外国人観光客や在住外国人のとりわけ多い大阪の地にある美術館として、台湾ではどのような部分を重視してプログラムを作成しているのか参照することに意義がある。また、文化財防災については、日本と同様に地震や水害の多い台湾の事例は参考に値する。

調査方法については次の通り。故宮では実際にデータベースを使用する研修を実施しながら、各部署の役割や連携について、所感も含めて研究員に広く聞き取りを行い、体系的かつ実情に従った把握に努めた。他館においては、協力を仰ぐことができた館員の担当業務に即して調査を進めた。

2 研修の成果

(1) 国立故宮博物院

(1)-1 概要

中国の歴代王朝に伝えられた文物を中心に所蔵・公開する博物館で、現行の形態としては1965年に開館した。清朝宮廷の伝来品のみならず、文物の新たな寄贈・購入等によってコレクションを増やし、2023年12月末時点での所蔵数は69万8857件にのぼる。2015年には嘉義県に南院を開館。2021年7月には北院初の大規模借用展として「遺珠 大阪市立美術館珍藏書画」を開催した。所蔵品管理や展覧会のほか、ウェブ上のデータベース・図書管理・教育普及コンテンツ等、デジタル技術を駆使した事業展開も幅広く手がける先進的博物館である。

(1)-2 組織

館長・副館長以下、事務部門の他に、総合企画処・器物処・書画文献処・登録保存処・行销業務処（販売業務処）・展示服務処・南院処・數位資訊室（デジタル情報室）がある。本研修では書画文献処に属しながら、データベース業務と関係の深い登録保存処や數位資訊室、南院処における調査を進めた。

(1)-3 データベース

書画文献処において、副処長何炎泉氏と助理研究員蘇雅芬氏をはじめとする諸研究員の協力のもと、内部データベースの項目・運営手法・日常業務や展覧会業務での活用方法を調査することができた。得られた知見として、故宮におけるデータベースの特徴や課題を挙げたい。

なお、故宮における文物に関わるデータベースは「故宮典藏資料検索系統」、「清代档案検索系統」、「図書文献資料検索系統」



【図1】 故宮北院事務棟

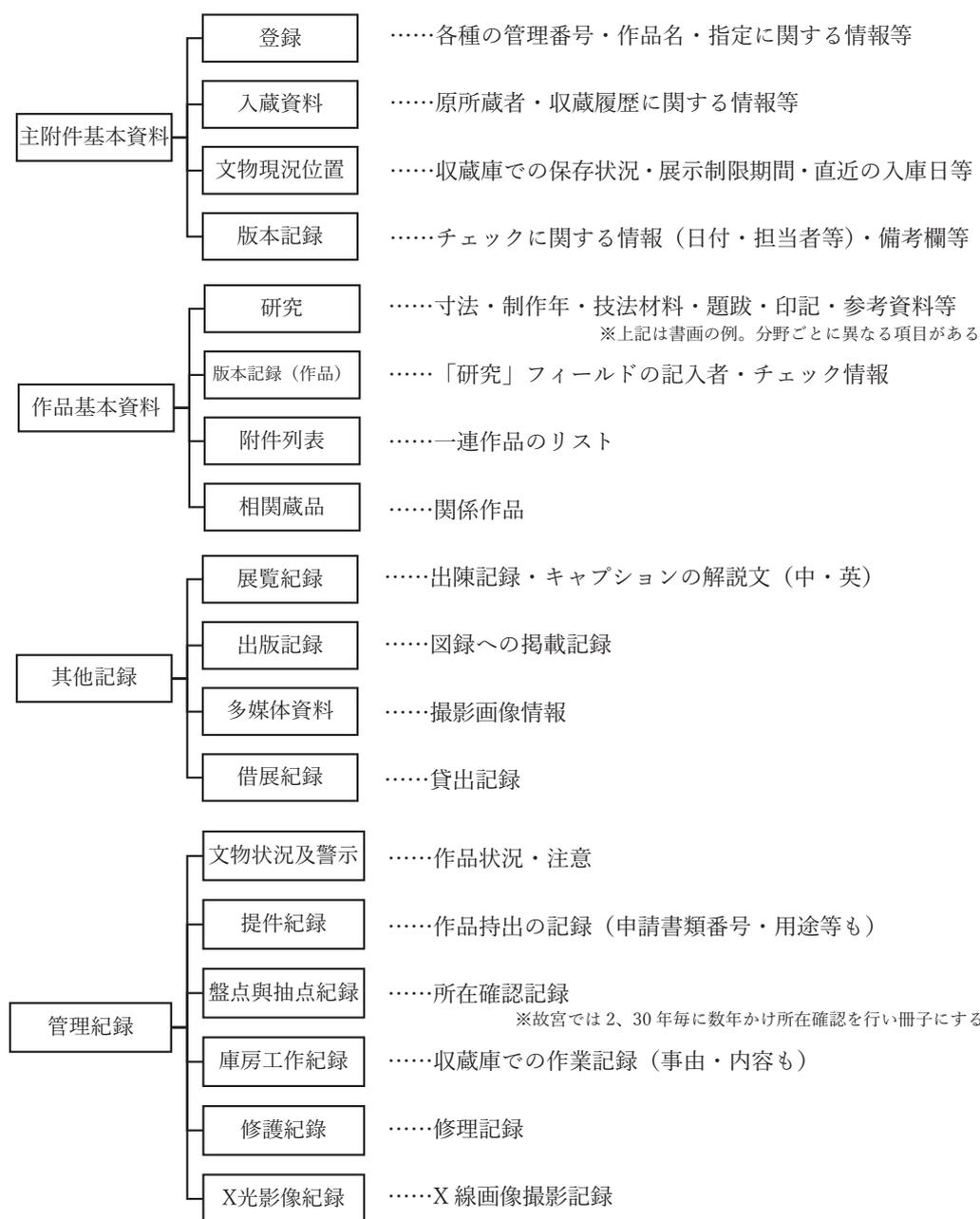
の大きく三つに分かれている。本研修では主に美術作品に関わる「故宮典藏資料検索系統」を調査したため、以下ではこのデータベースを中心に考察を進める。

①情報の網羅的なデータ化

故宮は宮廷伝来品が多いため、作品に付属する情報が膨大であるが、次のようにデータ整備を行うことで、内外に豊富な研究資源を提供している。

故宮の内部データベースの作品ごとの情報項目は、基本項目（作品名、作家名、指定等）以外に大きく4つの単元に整理され、さらにいくつかのフィールドに分かれている【図表1】。

このうち、一般公開データベースに表示される情報は、主に「作品基本資料」の部分だが、該当



【図表1】「故宮典藏資料検索系統」データ項目

の「盤点與抽点紀錄」と「修護紀錄」が作品ページからジャンプできるようになっている。

「作品基本資料」内「研究」の部分のみ、「書画典蔵」、「器物典蔵」、「織品典蔵」の3分野で【図表2】のように、それぞれの特性に合わせた項目が組み込まれている。

書画典蔵	作品号、品名、作者、数量、典蔵尺寸、創作時間、装裱形式、質地（例：綾）、 蔵品類型、作品類型、技法、色彩、集叢号、総集叢集資料、書体、釈文、題跋 資料（題跋類別、作者、位置、款識、書体、全文）、印記資料（印記類別、印主、 位置、印記）、作品内容、作品語文、参考資料、附註
器物典蔵	品名、創作者、蔵品尺寸、蔵品重量、中一時代（例：清）、西一時代（例：西元 1644-1911）、検索期間一起（例：西元1644）、検索期間一迄（例：西元1911）、 国別／産地、考古学文化、官作坊、窯址／窯属、出土／採集地、善後会品名、 善後会番号、原蔵殿閣、改制器、器形、功能、質材、款式、紋飾、局部形制、 釉色、製作痕跡、説明文
織品典蔵	品名、創作者、国別／産地、採集地、蔵品尺寸、時代、質材、類型／用途、技法、 色彩、紋飾、文物説明

※繻糸や繡仏等は書画典蔵に含まれる

【図表2】「研究」各分野データ項目

故宮の作品データベースの特徴は、テキスト化された資料情報の豊富さにある。書画典蔵でいえば、款記の釈文や題跋資料、印記が詳細に調査され、記入、校正を経て公開されている。さらに、参考文献や中文・英文の内容紹介、収蔵著録の記載もなされている。

また、図像や表現の情報が次のように登録され、検索の便宜が図られている点も、データベースを充実したものにしてしている。図像は「主題」として二層建ての登録用コードが用意されている。第1層に「山水」、「人物」、「樹木」、「走獣」等が、第2層には山水であれば「春景」等の四季、「夜景」、「名勝」、「瀑布」等、細分化されたモチーフが登録用コードとして存在し、それぞれ「主要主題」、「次要主題」、「其他主題」等の主題類別とともに登録されている。一作品につき、登録できる主題数の制限はないようである。技法についても同様に、「白描」、「工筆」、「写意」、「界画」等の登録用コードがあり、登録されている。なお、技法には第2層として「技法細目」の登録用コード領域が存在し、現時点ではこの第2層に登載されたコードはないが、今後充実されていくであろうことが見込まれる。

故宮において、こうしたデジタル化の作業は2000年代初頭から断続的に進められており、都度多くの研究員や研究助手が作業にあたっていたようである。現時点で全ての項目に情報が埋められているわけではないが、データベース立ち上げの時点で多くの項目を打ち立てておくことで、段階的にデータベースを育てていく基礎となるという好例といえよう。また、人名や用語の情報も随時追加されつつあるという。そうした情報も今後一般公開データベースに登載されていくことで、より充実していくとみられる。

以上のように、故宮のデータベースは、内部利用・外部利用ともに、作品に関連して分析・整理された情報が蓄積されることで、とりわけキーワード検索の利用時に機能を発揮するものとなっていることが確認できた。

② 展覧会・キャプション・図録アーカイブとしての役割

故宮のデータベースは、展覧会アーカイブとしての役割も担っている。内部データベースにおけ

る検索入口には「蔵品検索」（品名の横断検索）のほか、①で挙げた「研究」領域の項目が異なる「書画典蔵」、「器物典蔵」、「織品典蔵」の3種、それに加えて「展覧資料」として展覧会ごとの情報を検索することができる。【図表3】にデータ項目を掲出した。

展覧資料のデータ項目	典蔵単位（担当部門）、展覧名称（中文・英文・日文）、展覧地点（展示室）、展覧類別（例：特展）、展覧時間（期間）、策展単位（企画した部門）、策展人（キュレーター、担当者）、賛助者、協弁単位、展覧出版品、展覧総説明（中文、英文、日文）、展出蔵品資料（出品作品）
------------	--

【図表3】「展覧資料」データ項目

③日常業務における利用、ワークフローとしてのデータベース、各課連携

①にて示した網羅的な情報は、書画文献処においては研究助理（研究助手、本研修時点では1名）が入力作業にあっている。

内部データベースでは、展覧会企画や研究に有用な個人リストの作成とエクセルでの出力ができる。このほか、写真未撮影の文物リストや各様式での作品リストのダウンロード、収蔵庫での作業日誌入力、展示室ごとの作品陳列シミュレーターの起動などがデータベース上で可能である。故宮においては、こうした日常業務とデータベースを中心としたシステムが有機的に紐づき、機能し、作業の蓄積がアーカイブ化されている。このように様々な業務と紐づいたデータベースの事例から、収蔵品システムがワークフローと連動して機能する可能性を感じられた。

データベースを利用した各課連携については、「主附件基本資料」中「入蔵資料」（作品受入情報）部分において、受入時の公文書番号や登録保存処における作業名名の記入欄があるために、データベースによって各課各種の作業が一瞥できるようになっていることが確認できた。

④課題

現在の内部データベースは近年リニューアルされたものであり、若手研究員に使用感を尋ねると概ね「段階式の絞り込み検索方法（本報告時点における外部向け故宮典蔵資料検索 <https://digitalarchive.npm.gov.tw/Integrate/Index> にて表示される検索方法とほぼ同様のもの）はあまり使用しないが、各項目のキーワード検索機能も残っているので問題はなく、それ以外の部分についても特に不満はない」とのことであった。

ただし、新たな作品管理方法（RFID タグ等）の導入を検討している南院では、故宮において20年来培われてきたデータベースとその枠組みは変えることができないために、新たなシステムとの連携に課題が生じているとのことであった。また、故宮のデータベース全体は典蔵資料・清代檔案・図書文献の3種に公開当初から分かれており、それらを組



【図2】故宮南院外観



【図3】北院のタッチスクリーン



【図4】南院のタッチスクリーン

み合わせることは困難であるという。

このほか、外部向けの作品ページについて、一般利用者への普及という観点から、報告者は次の2点の課題があると考えます。第1に、①に挙げたように充実した情報量のある題跋や印記資料についてです。これらは学生や研究者にとっては重要な情報であるものの、時に膨大な量で画面上部に表示されてしまい、作品の紹介文が下部に表示されることで広く一般の利用者への訴求力がやや低下しているように感じられる。

第2に、一般利用者へ作品情報を提供する方法によって、教育普及素材としてのデータベースの利用価値をより高める余地があるという点です。故宮ではデータベースのトップページで各分野の入り口を分ける（同一のデータベースだがリンク先で検索結果を表示する手法）ことでアクセシビリティを高め、その先で段階的な絞り込み検索を設けているが、偶然性のある作品情報提供という点では欧米の事例ほどに様々な工夫がなされているわけではない。例えば、シュテーデル美術館デジタルコレクションでは、三つのキーワードをランダムに表示させ、検索でヒットした作品を示す箇所を検索窓に続けて設けられている。（<https://sammlung.staedelmuseum.de/en> 2024年2月1日最終閲覧。当該サイトは早稲田システム開発株式会社内田剛史氏からご教示いただいた）。

ただし故宮においてはデータベースページ以外の部分で、データベースを利用した教育普及活動として次の取り組みをおこなっている。北院・南院ともに展示室入口付近のガイダンスホールに大画面の高感度タッチスクリーンを設置しているほか、HP上でデータベースと別ページに教育普及コンテンツ「故宮線上学校」や、3Dによる作品鑑賞ページ、OPEN DATAページ（データベース上の作品ページからもジャンプできる）が建てられている。

また、南院においてはインタラクティブツールによる普及の試みが豊富であり、例として【図5】のような普及コンテンツが展示エリアに設置されている。



【図5】南院のインタラクティブデバイス（手前の方形を動かすことで画面上の器物が動く）

以上のように、データベースページ以外では故宮においてもデータベースと教育普及機能は十分に連結されているといえる。しかしながら、上述のようなコンテンツの導入はハード・ソフト両面において費用がかかることを考え併せると、現実にはデータベースページに教育普及の機能を盛り込むことが、当館あるいは同様の規模をもつ日本のミュージアムにとり適当な目標であると思われる。

(1)-4 デジタル技術と教育普及事業

数位資訊室に在籍経験のある書画文献処の蒲莉安氏の協力を得て、故宮におけるデータベースとデジタル技術を活かした教育普及事業について調査をおこなった。

数位資訊室における事業は、企画段階から各課との協力のもとに進められる。同課には、時期によって人数等は異なるものの、情報学や博物館学を専門とする研究員だけでなく、歴史学や芸術史学を学んだ研究員も在籍する。そのため、展示素材を制作するために取り上げる文物について、器物であればその特性や使用方法、書画であればその意味内容について適切な理解を得たうえで素材制作を進めているという。

企画や制作にあたっての発想源は幅広い。欧米や日本、韓国など幅広い地域の博物館、ICOM（国際博物館会議）、AAM（アメリカ博物館同盟）における取り組みの情報を積極的に収集するほか、数位資訊室では研究員同士での勉強会を定期的（週1、2回）に行い、展示や活動に関する情報交換を進めているという（なお、書画文献処でも展覧会準備の一環として文献を読む勉強会を開催しているほか、部署を越えた自主的な勉強会も開催されている）。

数位資訊室の成果の例として、デジタル技術を利用した展示素材の制作のほか、ハッカソン（ハックとマラソンを組み合わせた造語。ソフトウェア開発関係者が短期間に集中的な開発作業を行う催し）を主催して教育普及アプリケーションを開発した事例などがある。懷素《自叙帖》をテーマとした2016年のVR「自叙・心境」ではヒューストン国際映画祭金賞など多くの賞を受賞している。この作品は来館者に対してコレクションを高邁なものとしてではなく親近感を抱いてもらうために、アニメーションや実写を交えて文物の特性や特徴を表現したものだといひ、『故宮文物月刊』に制作経緯や展示報告等がまとめられている。また、ハッカソンについては博物館データ資源の「公共化」の視座から、オランダやアメリカ等の欧米の事例を参照して計画し、2017年に実施されたものである。また、2020年にはゲーム「あつまれ どうぶつの森」で同館の文物を再現できるマイデザインを公開するなど、国際的な視野を持ちながら多くの成果を挙げている。

なお、以前に教育普及事業とデジタル教育事業を司っていた教育展資室は現在解体し、行銷業務処が教育普及事業を引き継ぎ、数位資訊室がデジタル教育事業を引き継いでいる。

(1)-5 文化財防災

① IPM (Integrated Pest Management)

IPMについては登録保存処副研究員の楊若苓氏の協力を得て、故宮における虫害対策の取り組みを調査した。楊氏は虫害管理、予防性保存科学、シロアリの生態を研究領域とする研究者である。

日常業務においては、管理員が虫を発見した場合には登録保存処に報告するなど、状況の把握が
目指されている。また、トラップは1か月に一度調査をおこない、虫が捕捉されていれば取り換え、
3か月に一度はトラップを必ず取り替えているという。故宮の敷地は広いので調査には優先順位を
つけて進めている。シロアリに対してはベイト工法を行う。

故宮では人体への影響を考慮し燻蒸は行っておらず、脱酸素・加熱・冷却のいずれかの方法で生
物害の防除を行っているという。いずれも故宮内に処置設備があり、書画分野では展示後の作品を
収蔵庫に入れる前に必ず脱酸素処理を施しているという（ただし清朝宮廷絵画で頻繁に用いられる
プルシアンブルーは変色する可能性があるため注意が必要だという）。加熱処理は金属製の仏像内
部に納入物があった場合などに行い、摂氏45度で24時間あるいは摂氏55度で6時間など加熱する
処置であるというが、実際にはあまり行わない。冷却処理は書籍などに施す。

また、故宮では夜間にライトアップを行っているが、その照明には趨光性の蛾等を誘引しないよ
う、青色照明は使用せず、窓など館内部との接触点には当てないようにするといった配慮がなされて
いるという。この問題に関連しては、宜蘭県立蘭陽博物館が2019年に実施した虫に対する光害実験
の報告があることを楊氏からご教示いただいた。蘭陽博物館研究典藏組組長林正芳氏による蘭博電
子報113期「無害照明的追尋—全台首座友善照明博物館」(<https://www.lym.gov.tw/ch/collection/epaper/epaper-detail/b8a83b1d-38f4-11ea-a67a-2760f1289ae7/>)によれば、環境教育を推進している
同館として、夜間照明が生態系に及ぼす影響を懸念し、虫の誘引を最小限に抑えることを目指して
光害実験を行ったという。結論として、580nm以上の波長の光を選んだうえで昆虫の活動が少なく
なる日没後に照明を付け、周辺環境に考慮して長時間の照光を避けるべきであるとし、同館で使用
することにしたのは黄味がかった「単色波長590nm LED 50W 25度」の照明器具であるという。

②文化財防災

文化財防災については、国立故宮博物院主管法規查詢系統（法規データベース）(<http://law.npm.gov.tw/index.aspx>)に詳しい。国立故宮博物院災害緊急応変作業要点（<http://law.npm.gov.tw/LawContent.aspx?id=GL000046>）では、緊急事態発生時には「安全行政組」（事務・連絡・調
整・情報発表等）、「避難防護組」（避難・救護・建物やインフラの復旧等）、「文物抢救組」（文物の
救護・確認等）の3組に分かれ各種の対応にあたること、また各組を構成する人員についても既に
細かく既定されている。文物救護の優先順位としては、災害現場の状況に即して調整するものと記
したうえで、書画処は「借展品・国宝・重要古物・一般古物」の順、器物処・南院処は「借展品・
有機材質（紙質・織品優先）・瓷器・銅器・玉器」の順が明記されている。こうした方針が明示さ
れているほか、防災訓練も定期的実施することで、有事の際の機動力量向上が目指されている。

また、日常業務においても文化財防災が意識されている。書画文献処においては、収蔵庫や調査
室には必ず2人以上で入るという規則がある。そのほか、内部データベースに収蔵庫や展示室での
作品位置が記載されるほか、収蔵庫での作業日時・内容等が作品ページに集約されている。これら
は万一の事態が発生した際の原因説明や復原に有用な情報である。

(1)-6 日常業務と各課連携

①作品調査の見学

故宮では北院に保存されている作品を南院へ移す際にコンディションチェックを行い、展示や輸送に問題がないかを確認する。その際には登録保存処のコンサバターが同席し作品チェックを行う。調査室は書画文献処の事務室に近い場所にあり、作品調査の時間には院内の研究者が自由に入出し作品を前にして議論を交わすことができる（調査室内は撮影不可）。また、外部の研究者による作品調査も1人につき1年に10件以内との制限のなかで受け入れている。

②展示替えの見学

王世貞展の展示替えの見学をさせていただいた。故宮では現行の展示室の天井高が十分ではないため、殆どの軸では掛け緒を使わずに、展示ケース内上部に横渡しされたポールに軸の天を向こうに渡して作品を展示する。この際には紐を掛け緒に結びつけ、その紐の片側をケース壁面下部のフックに結びつけテンションをかける。また、軸枕はケース壁面に付けることで、作品への負荷を軽減させている。作品展示作業は全て故宮の研究者が行っている。

③企画会議への参加

書画文献処の企画会議に参加させていただいた。会議では、それぞれがパワーポイントや資料、口述など様々な形式で数分程度、自身の企画のあらましを述べ、フィードバックが返される。

④文物鑑定

故宮においては、文物鑑定は行っていないが、社会奉仕の一環として、実物の持ち込みによる文物相談サービスを実施している（ただし、書面上の証明書の発行等を行わない）。器物処・書画文献処の文献部門では随時電話予約を受け付けている。一方、書画文献処の書画部門では、開館日の毎週火曜日14時～16時、予約不要で相談を受け付けている。書画部門では当該業務の担当者をあらかじめ1年分割り振っている。

(2) 国立台湾博物館（以下「台博」とする）

(2)-1 概要

本館所在地：台北市中正区襄陽路2号
(228 和平公園内)

1908年に日本政府が台湾南北縦貫鉄道の開通を記念して設置した「台湾総督府博物館」に始まる、台湾で最も歴史ある博物館。現在の本館は1915年に落成・実用化された。現在は台湾政府文化部の管轄下で、



【図6】台博外観

台湾の自然史と文化史を中心とした総合博物館として、本館・古生物館・南門館・鉄道部園区の4館を運営している。

(2)-2 組織

館長・副館長以下、事務部門の他に教育推广組・展示企画組・典藏管理組・研究組の4課が設置され、各課には人類学、地学、動物学、植物学など異分野の研究員が配属されている。以前は各分野で課を構成していたが文化部に移管されたのちに上記の構成となったという。

(2)-3 教育普及について

教育推广組の方慧詩氏の協力を得て、教育普及分野の調査を行うことができた。方氏は教育普及プログラム「Blast to the Past: Walking Tour of Old Taipei」を企画・実施しており、報告者は2023年1月29日に実施された回に参加した【図7】。同プログラムは2ヶ月に一度の頻度で開催されているもので、内容としては台北城で唯一現存する城門である北門から、台博本館・二二八和平公園・台博南門館を回る徒歩（一部公共バスを使う）ツアーである。料金は一般50ドル（本館・南門館の入館料）。無線オーディオを利用する。使用言語は全て英語で、清朝から日本統治時代を中心とした台湾近代史にまつわる研究員及び学生ガイドによるきめ細かな解説を聴くことができる。所要時間は実質4時間ほどであり、途中で休憩はあるものの長く感じたが、本プログラムは台北ひいては台湾の成り立ちについて、博物館とそれを取り巻く街そのものから実感し理解できるという台博の特性を十全に活かしたもので、かつ現代社会全体の課題である持続可能性やLGBTQ+の権利等への言及もある啓発的なものでもあり、非常に良質な催しであった。

また、興味深い点として、使用言語が英語であるにもかかわらず、参加者の約8割が台湾人であったことを挙げたい。新型コロナウイルス感染症拡大以前でも参加者の約4割は台湾人だったという。方氏によれば、彼らの参加動機は「外国の友人に台北の街を案内する際に、英語でどのように説明するかを知りたい人や、子どもへの英語教育の一環として参加している人が多い」そうである（プログラムでは終了後にGoogleフォームによるアンケートを実施し、フィードバックを得ている）。英語教育が盛んな台湾のように、近い将来の日本においてもインバウンド対策と並走して、インバウンドと市民の垣根を越えた催しが必要とされていくのではないかと感じた。



【図7】台博ガイドツアーの様子

(3) 国立台湾歴史博物館（以下「台史博」とする）

(3)-1 概要

所在地：台南市安南区长和路1段250号
 2011年に開館した、台湾における様々なエスニックグループと自然環境との相関的な歴史を含む台湾史を展示する博物館。2020年には常設展をリニューアルし、多くのオーラルヒストリーやインタラクティブデバイス、マルチメディア、サウンドスケープを加え、展示全体の生動性をより高めている。また、2014年の三一八公民運動や2020年のCOVID-19関連の資料など現代社会に関連するコレクション形成も進めている。

(3)-2 組織

館長・副館長以下、事務部門の他に研究組・展示組・公共服務與教育組（公共サービス）・典藏近用組（収蔵）・數位創新中心（デジタルイノベーションセンター）の5課が設置されている。

(3)-3 データベース

資料の3D撮影を順次進めており、常設展内のタッチスクリーンで資料にまつわるストーリーとともに3Dデータを閲覧できるようになっている。

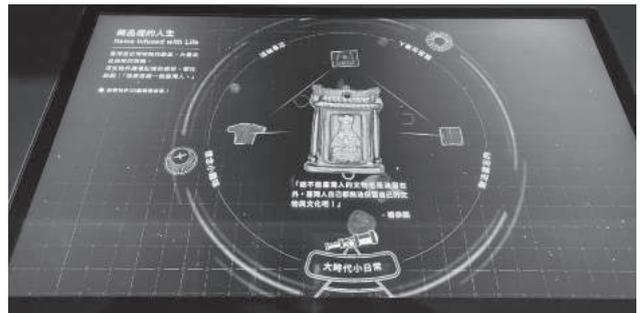
(3)-4 教育普及について

館内には子どもが遊びを通じて台湾の歴史や文化についての理解を深めることのできる児童ホールがある。屋内、屋外ともに広いスペースが確保され、自分の姿が映し出されるスクリーン上で様々な時代・民族の服を着せ替えられるコーナーや、未来の台湾の予想図を描き壁に投影するコーナー、積み木やマジョリカタイルを組み合わせて台湾の古民家を再現するコーナーなどが設置されている。

「時光列車」という列車型のシアターでは、列車のように



【図8】台史博外観 ソーラーパネルが屋根に敷き詰められている



【図9】台史博の3Dデータ鑑賞パネル



【図10】台史博児童ホール



【図11】タイルで古民家を再現する台史博の教育素材

揺れる空間の中で左右の窓に映し出されるアニメーション映像によって、台湾の現代から清時代に遡る歴史を知ることができる。長さは10分程度であり、音声やテキスト等による詳しい説明はなされないが、本プログラムは子どもに向けた教育素材というだけでなく、資料の豊富な常設展に進む前の導入として、台湾史の大まかな流れの把握に役立つ。

子どもに常設展へ足を繰り返し運んでもらうため、期間ごとにシンプルなゲームを提供している。2022年に最も好評だったのは「尋找小鴨」というアクティビティで、常設展内の数か所に設置されたカモの人形を全て撮影した来館者にはプレゼントを贈呈したという。

(4) 台北市立美術館（以下「北美館」とする）

(4)-1 概要

所在地：台北市中山区中山北路3段181号

1983年に開館した近現代美術館。台北市政府の直営団体で、所蔵作品数は5000件超。台湾初の現代美術館として開館し、故宮に所蔵される文物との年代的接続が意識されたことから民国以降の作品を収集対象とする。台湾最大の日治時代官方美術展作品コレクションをもつ。現在では現代美術の収集を積極的に進めており、台北ビエンナーレの開催やヴェネチアビエンナーレ台湾館の主催を行い、地域と世界を繋ぐプラットフォームの役割も果たしている。

(4)-2 組織

館長・副館長以下、事務部門の他に、研究発展組・展覧企画処・典藏管理組・教育服務組・行銷推广組が設置されている。本研修では、典藏管理組組長である方美晶氏と教育服務組組長である熊思婷氏の協力を得て北美館におけるデータベースおよび教育普及の状況を伺うことができた。

(4)-3 データベース

データベースに関わる部署である典藏管理組は作品購入・受贈・作品貸出等を担い、8名で構成されている。そのうち1名が作品登録とデータベースのメンテナンスを担当し、別の1名が修復を担当している（専門分野は紙だとのこと）。

台湾では各館が各自のデータベースシステムをもっており、北美館でもプロポーザル方式で選出したソフトウェア開発企業によるデータベースシステムを導入している。台湾政府文化部は2012～2014年に文物データベース「文典共構系統」を構築し、台湾各館のデジタルデータベース資料の統合を試みており、そのシステムを使用することも可能だが、北美館では台北市の予算によって自前のシステムを使っているという。

北美館では、各部門の業務のなかで絶えず新たなフィールドや項目が求められるため、データベースシステムを頻繁に更新している。追加が必要となった項目例としては、ニューメディア作品の展示再現方法の説明事項などがある。

北美館には典藏管理組とは別に3名で構成される情報部門があり、美術館全体のデータやハー

ド・ソフトの整備、ホームページメンテナンス等を担当している。

(4)-4 教育普及

教育サービス組の年間予算は日本円で約9600万円あり、音声ガイドに約360万円が割り振られている。北美館では毎年約18の展覧会を開催しており、英語ガイドはそのうち二つの大規模展を選出して作成している。ガイド作成にあたっては、外国の作家が先に英語原稿を作って録音し、北美館が翻訳して中国語ガイドを作るという流れの場合もある（専門の翻訳者に依頼することもある）。

ボランティアは約1000人おり、なかには英語ボランティアも含まれる。過去には決まった時間に英語ガイドツアーが開催されていたが、感染症拡大の影響でガイド利用者が減ったために予約制となった。

展覧会の性質に合わせて様々な教育素材を提供している。例えば、親子ツアーを設ける場合は教育冊子を作成する。また近年では、若手作家が自作を紹介できるよう、Podcastの録音設備を購入し館内に設置した。台北美術賞の展示では、各作家に自ら作品を紹介するビデオを録画するよう依頼しているという。

北美館の年間来館者のうち、児童数は来館者数全体の3分の1を占める60万人にのぼる。そのため親子連れの来館者を重視しており、館内には50人を収容できる大教室を設けている。通常の教育普及活動での人数は2、30人を目安としている。市政府直属の組織であるため予算の心配はあまりなく、教育普及活動の参加費は無料である。北美館には「児童芸術中心」が設けられており、4人の担当者が在籍している。美術館の中の美術館のように、児童のための展覧会を企画し、同時期に開催している展覧会に出品している作家に依頼して、児童が参加あるいは鑑賞できる作品を制作してもらうこともある。

(5) 海端郷布農族文化館（以下「布農館」とする）

(5)-1 概要

所在地：台東県海端郷海端村山平2鄰56号

台湾の原住民族であるブヌン族が居住する地域の一つ海端郷において、彼らの文化を紹介するため2002年に開館した博物館。地方において文化施設設立が推進されたなかで、最も早期に原住民地区で設立された館である。博物館としての収集・保存・研究・展示・教育等の活動に加えて、観光との連結によって地方産業の振興やコミュニティの活性化、民族固有のアイデンティティを示すことも目的としている。開館曜日は水曜日から日曜日で、開館日数は年平均300日、年間入館者数は約1万人。



【図12】布農館外観

開館曜日は水曜日から日曜日で、開館日数は年平均300日、年間入館者数は約1万人。

(5)-2 組織

郷長・秘書・民政課以下、展示教育組と公共服務組に分かれる計4名の職員（1名の研究員と3名の臨時職員）で構成される。

(5)-3 収蔵品

所蔵品数は48件で、多くはブヌン族の生活用具である。2019年に収蔵庫を改修した際、同じく台東県に位置する国立台湾史前文化博物館の指導を受けて環境整備を行ったという。

(5)-4 教育普及

館員の人数は少ないものの、多彩なテーマの展覧会を開催するとともに、地方史に関わるシンポジウムの開催や書籍の出版も積極的に進めている。地域の学校と連携し、子どもたちにブヌン族の文化や歴史への理解を深めるようなワークショップを開催している。開催例として、ブヌン族の命名について、伝統的な刀づくりなどがある。



【図13】布農館常設の農作業に関する説明展示

(6) その他

台北当代美術館（台北市）の建築は、もと日本統治時代に開設された小学校で、その後台北市庁舎として利用されていた施設をリノベーションしたもの。2001年に開館した現代美術館である。一部の展示作品のキャプションには小型のサインージが用いられていた。また、協賛企業として、プロジェクターやスクリーンなどを年度で提供する企業がある（エプソンやソニー等）。



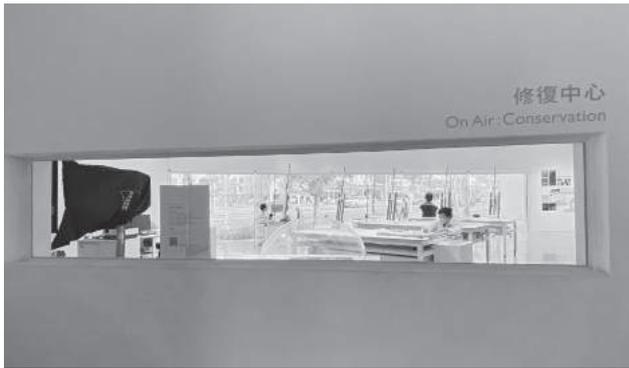
【図14】台北当代美術館展示室入口前のサインージ

高雄市立美術館（高雄市）は1994年に開館した美術館。2017年に行政法人化し、館内のハード・ソフト面の改善を進めている。2020年には「蛻変與新生 Transformation & Rebirth」を掲げ選出したアメリカのデザイナーと台湾の建築事務所との協同によって、建築や内装をはじめとする新たな形態への展開が計画されている。



【図15】台北当代美術館の協賛企業が掲載されたバナー

また、高雄市立美術館に近接する内惟芸術中心は高雄市立美術館、高雄市立歴史博物館、高雄市電影館の3館が共同して2022年に設立した複合施設である。現代美術展示のほか、修復中心が設置され、作品修復の様子が外から眺めることができ



【図16】内惟芸術中心修復室の小窓



【図17】内惟芸術中心修復室内部

るようになっており、毎月、修復士による陶磁器や油画といった材質ごとの講座や、その講座テーマに沿った材質の作品について、相談の受付を予約制でおこなっている。

3 所感と研修成果の活用について

日本の博物館施設にはレジストラが未だに少なく、ほとんどの館ではデータベース入力を学芸員がその他の多様な業務の合間に進めなければならないという現状がある。一方で、データベース業務の重要性や求められる専門性はますます高まっている。1936年開館の当館はもとより、公立美術館の設立ブームといえる1980年代から既に40年近くが過ぎ、全国的に学芸員の世代交代が進んでいるだけでなく、コレクションの受入事情をよく知る元職員に問い合わせることも困難となりつつある。紙資料のデジタル化はさらに、自然災害の経験からより切実なものとして眼前にある。ただちに完全なデータベースを作り上げることは困難だが、各館の状況に鑑みて運用の持続可能性を重視しながら、それぞれの知の蓄積をデジタルデータベースという形で次世代へと繋げるべき時期に来ていることは間違いない。

このたびの研修では、台湾の美術館・博物館におけるデータベースの運用事例や教育普及の事例を中心に調査を進められたことで、国外における水準を体感的にも知ることができた。また、政府を挙げてデジタル事業・データベース事業を積極的に支援している台湾の事例からは、地域のプラットフォームとしてのミュージアムの存在を学術性とアクセシビリティを高い水準で維持したうえで運営していくことの重要性も改めて感じられた。当館を含む日本の中小規模館では、故宮のように職員数や予算が大規模な館の活動をそのまま導入することは予算と人手の点で困難であると言わざるを得ないが、当館ではそうした現状に即しつつ、本研修で得られた成果はデータベース整備をはじめとする諸業務の見直しに最大限活かしていきたい。

そして、今回の研修を通じて、外国の美術を紹介するにあたり文物の伝来を丹念に記述し伝えることの重要性を改めて実感したということも付記しておく。台湾での故宮の存在は、中華文化圏における中华民族の文化的背景を伝えるという役割を越えて、既に台湾という地域のアイデンティティの一つとしても根付きつつある。さらに、東アジアをテーマとする南院の設立も地域における故宮の意義を強固なものとしている。当館のように日本で中国美術コレクションを擁する館もまた、学術拠点と

しても観光資源としても、文物が日本にあるということのもたらす様々な効果について自覚しながらデータマネジメントや展覧会、教育普及活動等を進める必要が今後ますます高まってくるだろう。私たちに異なる文化との出会いや理解をもたらしてくれる文物の可能性をいかに引き出すことができるか、データ管理と並走して模索していかねばならない。

そして、ここまでに述べた研修成果は次の3点で活用していく。第1に、データベースとワークフローの構築である。当館では現在、早稲田システム開発株式会社との協働によってデータベース構築を進めているが、フィールドや項目作成の点で研修によって得られた知見を反映させることで、中国美術の特性まで包括したものとするを旨とする。また、館内の日常業務・展覧会業務のワークフローを再検討し、データベースにおける他部門との情報共有やリスク管理、ワークフローとデータベースの連結を進めて業務の効率化を図る際にも、台湾における事例を参照していきたい。そのようにして、国内外の研究者や一般の利用者にコレクションをより幅広く活発に活用してもらえようなデータベースの構築を目指す。

第2に、若年層への訴求力向上と教育普及プログラム制作である。派遣で学び得たデジタルデータの応用事例を参考とすることで、当館における最重要課題の一つである若年層への訴求力向上・子ども向け教育普及プログラム制作について、当館のコレクションに即しながら新鮮なアイデアを打ち出していきたい。

第3に、研究や展覧会業務における人的ネットワークの活用である。今回、故宮をはじめとする多くの若手研究者やミュージアム職員との繋がりができた。地域は違えども、館の改修時期やミュージアムの諸業務に抱える問題意識等は共通するところがある。彼らと今後も連絡を取り合いながら、学術的交流や展覧会企画等へ展開させていきたい。

謝辞

本研修を実施し、本稿をなすにあたり、文化庁および日本博物館協会、国立故宮博物院書画文献処の皆さまをはじめとする各研修先とそのほか多くの方々に、温かいご支援とご指導をいただきました。ここに記して感謝を申し上げます。

(付記) 本稿は令和4年3月20日に文化庁に提出した「令和4年度ミュージアム専門職員等在外派遣事業」研修報告書および「海外博物館だより 国立故宮博物院(台湾)のデータベースシステムについて」『博物館研究』令和5年7月号(日本博物館協会)に加筆修正したものである。